

日本テニス選手の現状と課題 -男子大学生テニス選手を対象として-

著者名(日)	宮地弘太郎
雑誌名	研究紀要
巻	12
ページ	221-235
発行年	2011-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000336/

日本テニス選手の現状と課題 ——男子大学生テニス選手を対象として——

Intend for the present conditions and the problem
— boy university student tennis player of the japanese tennis player —

宮 地 弘太郎*
Kotaro MIYACHI

【抄録】

テニスプレーヤーが世界で活躍する目安は、世界ランキングで100位に入ることである。ここ数年、このランキングに到達する日本人選手は数少ない。これまでの世界ランキングに関する研究や、現場指導において、このランキングに到達する年齢は10代後半から、20代前半であると言われている。

2005年より日本テニス協会によって、新たにアフタージュニアの強化が、強化目標の1つとして掲げられた。アフタージュニアとは、18歳から22歳頃の世代を意味しており、いわゆる大学生テニスプレーヤーである。

そこで、本研究において日本男子大学生テニス選手の現状と課題を4点の柱から探り、今後大学生テニス選手の世界に挑戦する目安を明確にし、今後の強化活動に少しでも生かしていただけたらと考える。結果以下の2点の課題を提言してゆきたい。

1. 休学あるいは、卒業後にスムーズにツアーに順応できるよう、国内の学生大会の見直し。
2. 技能的な目安として国内で行われる全日本選手権で優勝争いに絡む、ユニバーシアードのシングルスで金メダルを獲得の2つをクリアする。

以上の2点をユニバーシアードチーム及び各大学教育機関の指導者、選手に徹底することで今後可能性が広がると考えられる。

Abstract

Based on the world ranking, a standard active tennis player should come in 100th place. For the last few years, there are few Japanese players who have reached this rank. According to research on world ranking, the age that reaches this rank is the latter half in one's teens, and the first half in one's twenties.

The Japanese Tennis Society aimed at focusing on strengthening the players after their

* 関西国際大学人間科学部

junior years in 2005. After junior years means players whose age is between 18 to 22 years old and are college students.

Therefore, it is thought in this study that it is useful for this purpose to research on Japanese college player's current situations and look at some issues concerning tennis ranking. Two points have been proposed as follows. One is about the leave of absence, or after one's graduates from the university, a domestic student meeting is reviewed which can be adapted to the tour.

Two is that the gold medal is cleared in singles of Universiade in close relation to the victory fight in the all-Japan championship done as a skill standard domestically and two of the acquisitions are cleared. It is thought that the possibility extends by persisting in the above-mentioned two points to the leader and the player of the Universiade team and each university education organization in the future.

1. はじめに

これまで、日本人男子テニス選手が、世界で活躍するのは難しいとされてきた。その理由として挙げられるのは、体格、文化、国土の違いなど様々な悪条件が挙げらる。しかしながら、島国である日本人男子テニス選手が海を渡り活躍する姿は近年目覚ましいものがある。90年代のS, M選手以降、世界ランキング100位以内（以降ATPランキングと標記する）に入った選手はK, N選手以外出てきていないが、ATPランキング100位台の選手は、2人続いて出てきている。これらの選手は、いずれも大学を経由せず、高校卒業後プロに転向している。ITF2009年のデータによると、男子テニス選手におけるピーク年齢は、23歳±2歳であり、ATPランキングで100位になるには2つの選択があるとされる。その一つはアメリカの大学に進学することである。アメリカの大学は日本よりもテニスの質、環境においてレベルが高く、在学中は、NCAA（全米大学テニス選手権シングルス）に優勝するとその年のUSオープン（4大会の一つであり、アメリカで行われる）のWC（主催者推薦枠）が与えられ、世界トップ選手と対戦が可能である。また、国内の国際大会は日本よりもはるかに多く、国内にしながらレベルの高い環境に身をおくことが出来るという利点がある。2つ目は、ITFジュニアでトップ10位に入ることである。これは、ジュニア部門の4大会で上位に進出する実力があり、なおかつ、一般部門の4大会のWCを獲得できる利点がある。いずれにおいても、近年の日本人選手に該当せず、日本国内の大学生テニス選手に可能性が少ないことが伺える。

2005年より日本テニス協会によって、新たにアフタージュニアの強化が、強化目標の1つとして掲げられた。アフタージュニアとは、18歳から22歳頃の世代を意味しており、いわゆる大学生テニスプレーヤーであり、現在、高い志を持ち大学生の中で世界へチャレンジしようとする者はごく僅かである。ここ数年、各大学に専任の指導者が入るケースが多く見られ、大学テニスのレベルも向上してきているように感じる。2010年の全日本選手権において大学生選手（ユニバーシアード候補選手を含める）は、本戦にシングルスでは、14名ダブルスでは19名がエントリーし、シングルス優勝、ベスト4、ダブルス準優勝、ベスト4、ミックスダブルスにおいても、準優勝という結果であった。全日本選手権大会はその年の日本一を決める大会であり、日本のトッ

ブ選手も多数参加する。ATP, ランキング 100 位台～200 位の選手も数名おり、彼らに対等に勝負できることが証明されれば、大学に進学しても卒業後世界へ挑戦する可能性も考えられる。

一方、世界に目を向けてみると、今年度 10 月の ATP ランキング 200 以内に 11 人の大学出身者がランキングに連ねている。彼らの平均年齢は、 28.1 ± 2.9 歳である。ATP ランキング 200 位以内であれば、4 大会の予選に挑戦する権利が得られ本戦に進出する可能性は十分にある。このことから、大学に進学してもツアーに出る準備を十分に行い、それからでも可能なのではないだろうか。

そこで、本研究においては、この世代の強化という視点から、今後、日本の大学生が卒業後に世界に挑戦する為の強化策をⅠ、日本の大学生と海外の大学出身者（Ⅰ、ATP ランキング及び大会数 2、日本男子大学生テニス選手における国内ランキング及び ATP ランキング 3、国内学生大会スケジュール）Ⅱ、過去のユニバーシアードでのメダル獲得者 Ⅲ、全日本選手権での検討 Ⅳ、ユニバーシアードでの取り組みと結果（Ⅰ、本大会結果とシード順位 2、大会視察と現場指導 3、WC の提供）の 4 本の柱を基に検討し、提言して行きたいと考える。

2. 現状と課題

2.1 日本の大学生と海外の大学生及び大学出身者

(1) ATP ランキング及び大会数

下記表 1 は、ATP ランキング 1 位～200 位までの大学出身者のランキングと国籍、大学名である。殆どの選手が、アメリカの大学出身者である。

表 1 ATP ランキング 1 位～200 位の大学出身テニス選手

人数	氏名	ATP	国籍	大学名
1	I,J 選手	20	USA	The University of Georgia
2	Lu,Y-H 選手	39	TPE	National Taiwan College of Physical Education
3	R,M 選手	87	USA	University of Miami
4	B,B 選手	59	GER	Baylor University
5	D,S 選手	96	IND	University of Virginia
6	S,R 選手	117	USA	University of Florida
7	B,J 選手	135	USA	Harvard University
8	L,P 選手	137	AUS	Californina State University Furesno
9	R,R 選手	165	USA	University of Illinois
10	K,K 選手	182	USA	UCLA

表 2 は、日本とアメリカにおけるフューチャーズとチャレンジャーの大会数である。この、フューチャーズとチャレンジャーとは、ツアー下部の大会であり、ここでランキングを上げ 4 大会に出場するためのポイントを稼ぐのである。単純に比較してみても、大会数に大きな差があり、日本においては、フューチャーズ 11 大会、チャレンジャー 2 大会、一方のアメリカは、フューチャーズ大会が、29 大会、チャレンジャー大会が 19 大会である。これは、表 1 において 4 大会に出場する可能性のあるランキングがおおよそ 200 位であるが、そのうち大学生出身者が、9 名であり殆どの大学がアメリカに本拠地を置く大学である。その要素の一つとして、アメリカ国内でツアー下部大会が、日本よりも充実していることが挙げられるのではないだろうか。

表 2 日本とアメリカにおける大会数の違い 2010 年 10 月現在(<http://www.atpworldtour.com/> より抜粋)

グレード	フューチャーズ		チャレンジャー			
賞金総額	\$10,000	\$15,000	\$35,000	\$50,000	\$75,000	\$125,000
日 本	9	2	2(+H)			
アメリカ	20	9		17	1	1(+H)

下記表 3 は、ATP ランキング 200 位内の選手と、日本ユニバーシアド候補選手の国際大会試合数であるが、年間平均にして ATP1 位～200 位の選手は、 25.0 ± 4.5 大会、一方の日本のユニバーシアド候補選手は、プロを含んだ選手で、 6.4 ± 5.8 大会である。トップ選手のうちの 10 名は、全て大学出身者であるため、1 年間フルにテニスの活動に割り当てられるが、日本のユニバーシアド候補選手は、学業や国内の学生大会の拘束により、国際大会への出場が制限される。その為、在学中に ATP ランキングを向上させることは非常に困難であることが伺える。

表 3 世界ランキング 1 位～200 と日本のユニバーシアド候補選手の大会数及び平均大会出場数（国際大会）

ATP1 位～200 位選手	ユニバーシアド次期候補選手
平均 \pm 標準偏差	平均 \pm 標準偏差
25.0 ± 4.5 大会	6.4 ± 5.8 大会【プロ含む】
	3.0 ± 2.5 大会【大学生のみ】

(2) 日本男子大学生テニス選手における国内及び海外でのランキング

表 4 は、次期ユニバーシアド候補選手における ATP, JOP ランキング（世界ランキング、日本ランキング）であり、ユニバーシアドの本大会シングルスにおいてシードが獲得できるとされる 500 位～700 位に位置する選手は、1 名のみである。

日本ユニバーシアドチームとしてもメダル獲得が一つの目標であり、その為には、本大会でのシード権を獲得することが必至である。

表 4 次期ユニバーシアド候補選手における ATP, JOP ランキング

候補選手	所属	ATP	JOP
B, S 選手	プロフェッショナル	790	21
T, N 選手	プロフェッショナル	771	14
Y, S 選手	プロフェッショナル	235	4
J, I 選手	W 大学	1122	30
S, K 選手	W 大学	1061	35
H, O 選手	N 大学	1140	29
Y, I 選手	K 大学	1278	99
K, W 選手	S 大学	1264	45
Y, T 選手	W 大学	1186	38
T, E 選手	W 大学	1520	34

下記表 5 はユニバーシアド・ベオグラード本大会における男子シングルのシード順位である。第 1 シードの S, I 選手は、今年度の 4 大会のひとつである全豪オープンで予選 3 回戦を勝ち上がり、本戦 2 回戦まで進出した。最終的に、銅メダルであったが、十分金メダルは狙える実力はあると感じている。

表5 昨年度のユニバーシアード大会における男子シングルのシード及び世界ランキング

シード	氏名及び国籍	ATP
1	S, I 選手 (UKR)	307 位
2	S, A 選手 (UKR)	431 位
3	D, E 選手 (RUS)	448 位
4	S, A 選手 (SRB)	536 位
5	C, I 選手 (CRO)	562 位
6	L, H-H 選手 (TPE)	569 位
7	S, J 選手 (CZE)	630 位
8	A, S 選手 (KAZ)	649 位

(3) 国内大会スケジュール

大学テニス連盟主催大会は、関東、関西、九州、中国、四国、東海、北海道、北信越、東北の8地域で主に個人戦が3大会（春季トーナメント、夏季選手権、新進トーナメント）、団体戦（大学対抗テニスリーグ戦）が1大会、全日本学生テニス連盟が主催の個人戦2大会（インカレ・インカレインドア）、団体戦（大学王座）1大会で構成される。これ以外に、全日本選手権、国民体育大会、JOP大会、国際大会には任意で出場する。この大会と両立で大学生本来の授業に出席し単位を修得し卒業しなければならない。また、下記表6は関東地域を基準としたユニバーシアードチームの主な学連主催の学生大会の一覧である。テニスと学業の両立を図りながら、世界に出る準備をしてゆくには至難の技であると考ええる。

表6 関東地域を基準としたユニバーシアードチームの主な出場大会（学生連盟主催）

大会数	大会名	開催期間
1	関東学生テニストーナメント地域学生大会(春季)	5月下旬～6月上旬(約1週間)
2	関東学生テニス選手権大会地域学生大会(夏季)	8月中旬(約1週間)
3	全日本学生テニス選手権大会	8月下旬～9月上旬(約2週間)
4	関東学生対抗テニスリーグ	9月中旬～10月上旬(約1ヵ月間)
5	全日本大学王座決定試合	10月下旬(約1週間)
6	全日本学生室内テニス選手権大会	12月上旬(約1週間)
7	関東学生新進テニストーナメント	3月中旬(約1週間)

2.2 過去のユニバーシアードでのメダル獲得者

下記は、過去8大会においてのメダル獲得者を表7に示す。

表7 過去8大会における金メダル獲得者（シングルス）

開催年度・開催都市	メダル獲得者
1995・福岡	Yoon Yong-il (KOR)
1997・シチリア	Yoon Yong-il (KOR)
1999・マヨルカ	Lee Hyung-taik (KOR)
2001・北京	Lee Seung-hoon (KOR)
2003・テグ	Lu Yen-hsun (TPE)
2005・イズミル	Artem Sitak (RUS)
2007・バンコク	Danai Udomchoke (THA)
2009・ベオグラード	Slovic Aleksander (SRB)

1999年、2003年、2007年における金メダリストは、過去における4大会出場者であり、1999年マヨルカ大会の金メダリストであるLee.H-T (KOR) の自己最高世界ランキングは2007、8に記録した36位で、2000年から2008年までの8年間4大会に本戦入り出来るランキングをキープした。次に2003年テグ大会の金メダリストであるLu Y-H (TPE) の自己最高世界ランキングは2010、10に記録した39位であった。最後に2007年ベオグラード大会で金メダルを獲得したUdomchoke Danai (THA) の自己最高世界ランキングは2007、1に記録した77位であり、その年に開催された全豪オープンで3Rに進出した。これらのことから、ユニバーシアード大会のシングルスで金メダルを獲得することは、世界に順応できる材料であると考えられる。

2.3 全日本選手権での検討

全日本選手権とは、その年の国内1位を決める大会であり、優勝者はその年のAIGオープン（4大会の下部組織の大会であり、世界のトップ選手が出場する大会である）のシングルのWCが提供される。また、デビスカップ（国別対抗戦）のメンバー入りも可能となる為、よりレベルの高い大会、相手と試合をすることができるため技術的向上や、モチベーションの向上に繋がることが考えられる。下記の図1は、JOPランキング（日本ランキング）74位まで（全日本選手権本戦出場可能ランキング74名）の割合を示した図である。出場選手の殆どが、プロ選手であり、大学生（ユニバーシアード候補選手含む）は全体の23%である。また、ユニバーシアード候補選手以外の大学生は、全体の9%である。今後、全日本選手権の本戦に出場する大学生を増加させることが、大学テニス界全体のレベルアップに繋がると考えられる。

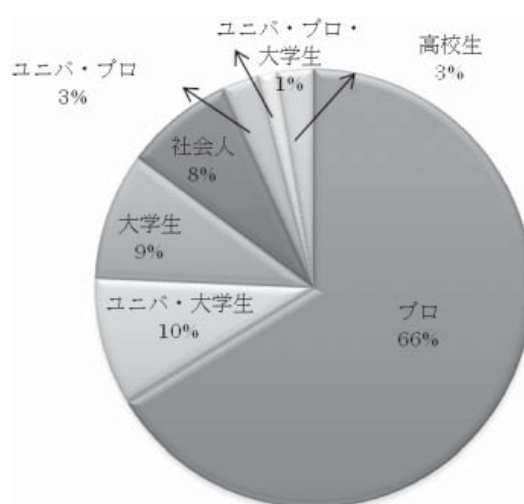


図1 JOP ランキング 74 位までの割合

下記図2は、過去15年間の全日本選手権における大学生の戦績である。99年を境に下降傾向にあり、2009年度大会では半分になっている。今後、この減少について検討する必要性がある。

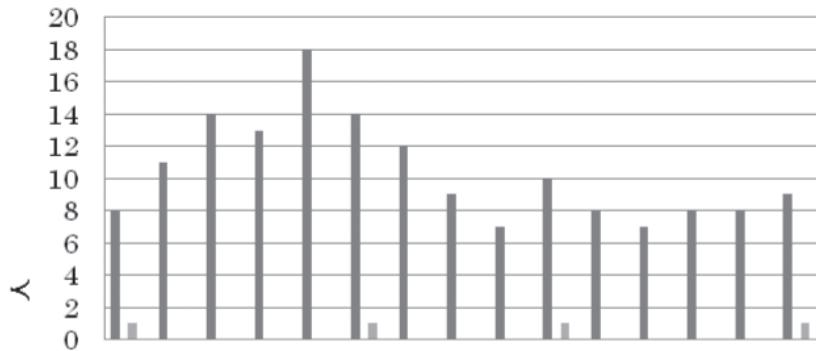


図2 過去15年間に於ける全日本選手権での戦績（大学生）

下記の図3は、過去15年間の大学生の全日本選手権の出場推移である。過去、4度大学生が決勝戦に進んでいる。昨年度の優勝者のランキングは、日本ランキング1位、ATP ランキング119位であり、準優勝者のランキングは、日本ランキング4位、ATP ランキング235位（2010, 10月末）である。また、デビスカップ（国別対抗戦）の代表でもあり、全日本選手権で優勝争いに絡むということは、卒業後のプロ転向への目安の一つであると考えられる。

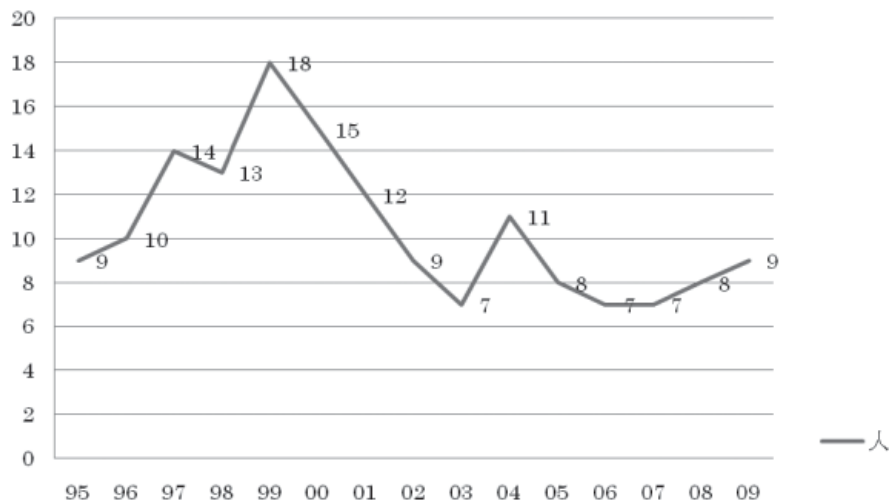


図3 過去15年間に於ける全日本選手権の出場推移（大学生）

2.4 ユニバーシアードでの取り組みと結果

ユニバーシアードとは、国際スポーツ連盟が主催する全世界の学生総合競技大会である。この競技大会でメダルを獲得するということは、その後の競技生活に大きく貢献出来ると考える。日本男子テニスチームは、前々回大会のトルコ・イズミル大会（2005年）でミックスダブルスにおいて銅メダルを獲得して以降メダルは獲得していない。2009年7月に行われたセルビア・ベオグラード大会では是が非でもメダルを獲得するために2年間強化に取り組み、国際大会の視察、主催者推薦枠（wc）の提供、日本テニス協会のテクニカル・サイエンスサポート（TSS: 旧スポーツ科学委員会）による映像分析、国内合宿と様々な方々の協力を得て今できる最大限のサポートを行ってきた。しかし、男子においてはメダルを獲得することすら出来なかった。

(1) 国内大会の視察及び TSS による映像分析

下記の表 8 は候補代、表選手の大会視察一覧である。各選手の試合を視察する一方で、今後のスケジュール確認や、TSS による映像分析（試合をビデオに録画し選手にフィードバック）を行った。

表 8 候補・代表選手の大会視察一覧

大会名称	視察対象
男子フューチャーズ 2008 F10 「TTC かしわオープン」	代表候補選手
JAPAN F4 軽井沢フューチャーズトーナメント 2009	代表選手
	他国参加選手
JAPAN MANS F5FUTURES 2009 草津国際ヨネックスオープン	代表候補選手
慶応チャレンジャー国際テニストーナメント 2009	代表候補選手
平成 21 年度全日本学生テニス選手権大会	代表候補選手
平成 21 年度全日本学生室内テニス選手権大会	代表候補選手
ニック全日本テニス選手権 84th	代表候補選手

(2) 国内国際大会における WC の提供及び TSS による映像サポート

下記の表 9 は、候補選手及び代表選手においての WC 提供リスト一覧である。WC とは、主催者推薦枠であり、ランキングが低いため予選からエントリーする、またはランキングが低いため大会に出場することが出来ない有望な選手を対象に与える枠のことである。本大会では、シードを獲得することがメダルへの絶対条件で有るため、可能な限りチャンスを与えた。また、視察のところで述べたが、各試合を映像に収め各選手にフィードバックを行った。

表 9 国内国際大会における WC 提供一覧

2009 年度各種大会（本大会直前までの WC 実績）	種別
アディダス早稲田大学フューチャーズ国際テニストーナメント 2009	ダブルス本戦
JAPAN MANS F5FUTURES 2009 草津国際ヨネックスオープン	ダブルス本戦
エレッセ甲府国際オープンテニス 2009	シングルス本戦
アディダス早稲田大学フューチャーズ国際テニストーナメント 2009	シングルス本戦
JAPAN F4 軽井沢フューチャーズトーナメント 2009	シングルス、ダブルス本戦
アディダス早稲田大学フューチャーズ国際テニストーナメント 2009	ダブルス本戦
慶応チャレンジャー 2009	ダブルス本戦
慶応チャレンジャー 2009	ダブルス本戦

(3) 国内合宿、体力測定、講義

年始に候補選手を集め、トレーニング測定合宿を行った。個人の体力を把握することにより、自身の得意な部分にプラスする、不得意な部分をトレーニングにより補うといったようにテニスの技術だけでなく、けがをしない体作り、自身の弱い部分を把握するということは今後のテニス活動において大いにプラスとなると考える。また、講義においてはドーピングや栄養学、トップアスリートにおける心構えを各部門の代表者に講義していただき、テニスだけでなくスポーツマンとしてあるべき行動、言動を大学生の代表として再認識したと考える。

(4) 本大会における男子競技成績及び男子シングルスシード順位

下記は、本大会における男子の競技成績である。メダル獲得の可能性のあった、男子ダブルス、

混合ダブルスにおいて、共に第4シード獲得することができたが、メダル獲得にあと一步届かなかった。又、シングルスにおいても3Rで敗退という結果に終わった。

表 10 本大会における男子チームの競技成績

氏名	出場種目競技成績
S, I 選手	混合ダブルス入賞, 男子ダブルス 2 R
H, O 選手	男子ダブルス 2 R, コンソレーションベスト 8
Y, K 選手	男子シングルス 3 R
B, S 選手	男子ダブルス 2 R, コンソレーションベスト 4

3. 今後の展望

2.1～2.4の現状から今後の課題として2つ挙げられる。1つ目は休学してツアーに専念する。2つ目は、在学4年間をツアーに出る準備期間として、活動してゆくことである。まず、1つ目の休学に関しては、在学中にツアーで活躍する可能性は学業との両立を考えると困難であり、在学中にツアーに専念するには、休学することが解決策として挙げられる。2つ目の具体案として2つの目標に向い強化活動してゆくことである。まず1つ目は、全日本選手権で優勝争いに絡むことである。昨年優勝した、G, S 選手は世界ランキング119位、であり、準優勝したユニバーシアード候補選手、デビスカップ代表選手でもあるY, S 選手は世界ランキング235位である。またその他の日本選手において現在4大会に出場可能な選手でもある、K, N 選手は122位、T, I 選手は190位（いずれも2010, 10月現在ATPランキング）。である。彼らと対等に戦える大学生選手が出てくれば世界に挑戦する一つの目安となると考える。2つ目は、ユニバーシアード大会のシングルスにおいて金メダルを獲得することである。95年の福岡大会以来男子シングルのメダル獲得者はいない。ダブルスにおいても、2大会前のイズミルで入賞した以来、メダル獲得はない。ユニバーシアードチームとしても次回大会において、シングルスで入賞、ダブルスで銅メダルを獲得することが急務であると考え。メダルを獲得する上で最重要課題は、ATPランキング向上である。現在の大学トップ選手は、ユニバーシアード代表選手ですら全日本学生テニス選手権に出場するためには、春季地域学生トーナメントに出場しなければならない。今後、ユニバーシアード代表選手は、国内における個人戦は、軽減させるなどの処置を取り、より積極的に国際大会にチャレンジしてゆく必要性が挙げられる。また、国内のみならず、夏季及び冬季休暇を最大限に利用し、海外に遠征に行き、外国人とのレベルの高い中で実践経験を積み、プレイの質をあげ、戦術のバリエーションを増やすことも課題として挙げてゆきたい。

【参考文献】

- 1) トップテニスプレイヤーにおける「早熟型」と「晩成型」の比較分析, 坂井, 利彰, 坂井, 紗恵, KEIO SFC JOURNAL Vol.9 No2.2009, 101-112
- 2) フューチャーズ開催にみる強化世界展開の可能性－亜細亜大学国際テニス大会開催の意義と課題（第1回総合学術文化学会学術研究会の報告, 第1部「自然と情報・体育と健康」科学分科会）, 亜細亜大学学術文化紀要, 亜細亜大学学術文化紀要（11）, 亜細亜大学総合学術文化学会, 堀内昌一, 42-49, 2007
- 3) 男子大学生テニスプレイヤーの今後の可能性～2年間のユニバーシアードチームの強化策から～テニス

の科学 第18巻 宮地弘太郎（関西国際大学），道上静香（滋賀大学），細木祐子（園田学園女子大学），
高橋仁大（鹿屋体育大学），54-55

4）ATPTOP100 にみる日本人の可能性，田中伸明，渋谷隆良テニスの科学 第13巻，22-24，2005

5）<http://www.atpwordtour.com/>

6）<http://www.itftennis.com/>